

戦前・南洋の日本人町を歩く

第四部 ホイアンの日本人町(下)

作家
太田尚樹

●おた・なおき 1941年生まれ。東海大学名誉教授（スペイン文明史、比較文明論）。スペインに関する著作からノンフィクションまで幅広く執筆。最新刊は、『乱世を生き抜いた知恵 岸信介、甘粕正彦、田中角栄』（ベスト新書）。

ホイアンの町に降り注ぐ陽光

ヴェトナム中部にあつて世界遺産の町ホイアン。四百年前の江戸時代初期、朱印船貿易によつて日本人町が形成され、最盛期には三百人（二説には千人）の日本人が居住していた町である。当時はオランダ東インド会社の商館も設けられるなど、西洋と東洋の貿易拠点となつていたのがここホイアンである。その後鎖国政策によつて日本に引き揚げることになつたが、この地に残ることを選択した日本人もいたのは、惹きつけるものがあつたのだろう。

二〇一八年一月、ホイアンの町に降り注ぐ日の光は、ただでなく、壁板にも彫刻が施され、光と風を採り入れる中庭の石の壁まで、彫刻がつづいている様は、美術作品を思わせる。

表通りに面した空間が店で、その奥が先祖を祀る祭壇。祭壇の黒い重厚な光は、この家の歴史と財力を物語っているが、店主に聞くと、彼らの先祖は華南の福建省出身で、三百年つづいた家だという。その奥が客間で、茶の国中国らしく、古い茶器が揃っていた。この佇まいは、「商」「先祖への畏敬の念」「客」が並んでセットになつていたり、何を物語っている。何ゆえ祭壇が店先に置かれているのか不思議に思えるが、「信用」が命の商人には先祖代々に遡る「家」の存在が不可欠で、客間は客との団欒を大切にす商人道の作法が見えている。その奥はプライベートの生活空間で、書齋を兼ねた事務室、中庭、寝室、食堂、そして台所と厠が向かい合い、裏通りにつながる。この配置はペナンの華僑の商家も、概ね同じであつた。

日本町ここにありき

では日本町があつた痕跡はどこにあるのかとなると、

マイルドだった。溢れる光のなかを、四百年前の日本人の姿を思い浮かべながら歩いていると、心が浮き立ってくる。彼らの遺した刻印を探し求め、息遣いを感じ取るのは易しいことではないが、彼らと対話している心持ちになれるのは確かだ。

日本人が造つたとされる、通称日本橋に通じる目抜き通り、チャンフー通りを東から西に向かう。中国風の古い民家はほとんどが商店だが、中でも左手の廣勝家は平屋で、京都の町屋に似た建て方である。

初代から一家の主人は貿易商を営み、女性たちが輸入品や地元の産物を商う、幅広い物産店として財をなしてきた。奥に長い建て方はほかの家も同じだが、廣勝家はいたるところに使われた黒檀と紫檀の柱や梁に

ヴェトナム人研究者は日本町も中国人町も、佇まいは類似しているとみる意見が多いのである。彼らは日本町が消えた後に中国人が表面の造作を変えて改築した事実を指摘しているが、日本人が売り渡した証文が根拠になつている。

そこで、目抜き通りチャンフー通りを東から進んで右手の八〇番にある「貿易陶磁博物館」に入ると、ある程度納得がいった。無傷の陶器類は近海の沈没船から引き揚げられたもので、陶器のかけらは古井戸や発掘調査によつて出土したものだった。博物館の説明では、肥前（現佐賀県）の焼き物とされ、主として唐津焼、伊万里焼、有田焼らしい。小皿、中皿、どんぶりの類が多く、これらを商い、生活用具としても使用していたとみられる。

博物館で注目されるのは、「茶屋新六交趾国貿易渡海図」の写しの一部である。この図巻は文禄期（二五九三〜九六）以来、尾張藩の御用商人で海外貿易を営んでいた茶屋家から、名古屋市東区的情妙寺に寄進されている。描かれているのは、茶屋新六なる人物の貿易船が交趾（こうし／こうち。現在のヴェトナム中部以南）へ渡航した折の模様を絵師に描かせたもの。元和年間